

10月11日 (日) 歴代上 8章	「彼らは皆ベニヤミンの子孫である」(40節)。歴代誌のはじめの9章に渡る系図で、ベニヤミン部族は7, 9章にも書かれ、本章はまるごとベニヤミン。内容が一部違うが、どの名前もおそろかにしたくなかったのか。「主に背いた罪(10:13)」に定めながらも、最初の王サウルの家系を大切に残した著者たちは、これが使徒パウロに至るとはよもや知らなかっただろう。
12日 (月) 歴代上 9章	「彼らの先祖も主の宿営の入り口を守っていた。エルアザルの子ピネハスが以前彼らの長であった」(20節)。神殿も祭壇もない70年、伝えられるまま守ってきた主の前の勤めを忠実に実践に移した「捕囚後世代」のレビ人たち。歴代誌は「彼らの先祖の時代」を思い起こし始める。ピネハスが大祭司だった士師時代を経て、サウルそしてダビデの時代を語るため。
13日 (火) 歴代上 10章	「サウルは彼の武器を持つ従卒に命じた。『お前の剣を抜き、わたしを刺し殺してくれ...』だが、従卒は非常に恐れ、そうすることができなかった」(4節)。敵軍に迫られ、息子たちはすでに討たれ、自身も傷を負ったサウルの悲しさ。従卒は殺すことを恐れ、できなかった。できなくてよい。人がこんな思いをさせられる場面が、地上からどうかなくなるように。
14日 (水) 歴代上 11章	「三十人の頭の中の三人が、アドラムの洞窟にいるダビデを訪ねて岩山に来たことがあった」(15節)。「ダビデの勇士(10節)」たちのトップ3。ダビデが王となってから召し抱えられたのではなく、ダビデがまだサウル王に憎まれて逃げ回っていた時代、隠れていた洞窟に訪ねてきたと記されている。「戦意」よりも、苦難にある友への「想い」を聖書は「勇」とする。

メール配信登録メール senfkorn.obc@gmail.com

メール配信希望の方は名前とアドレスを明記の上、上記のアドレスまで

15日 (木) 歴代上 12章	「イサカルの一族からは、時に応じてイスラエルが何をなすべきかを見分けることのできる頭たち二百人と、その指揮下にある同族のすべての者」(33節)。ダビデに味方する者が各部族から集まる中、異彩を放つイサカル族。何万の数でもなく、一人の武勇や賢人でもなく、臨機応変の判断力をもつ二百名とその同族。神は多様な人と群れとを育てられる。
16日 (金) 歴代上 13章	「その日、ダビデは神を恐れ、『どうして神の箱をわたしのもとに迎えることができようか』と言って、ダビデの町、自分のもとに箱を移さなかった」(12-13節)。イスラエル全土の王権と神の箱、すべての力と権威が自分のもとに来るかというとき、神の箱の運搬は犠牲者を出して失敗。喜びが恐れに急変。ダビデの心に、権力と権威を預かる備えはあったのか。
17日 (土) 歴代上 14章	「ダビデは、主が彼をイスラエルの王として揺るぎないものとされ、主の民イスラエルのために彼の王権を非常に高めてくださったことを悟った」(2節)。神の箱運搬失敗の惨事後、ダビデは諸国からの好意も敵意も経験する中、自分がただ主によって、主の民のために王とされたことを悟る。神の箱を運び込む場所も組織も、心も整えられていったことだろう。
18日 (日) 歴代上 15章	「神の箱を担ぐのは、レビ人でなければならない。彼らこそ、主の箱を担ぎ、永遠に主に仕えるために主によって選ばれた者である」(2節)。十戒の石板が納められた主の箱は、主なる神の臨在のしるし、永遠の契約そのものであり、彼らの礼拝の中心だった。私たちの礼拝の中心は十字架の主である。その主に永遠に仕える信仰をもって今朝の礼拝をささげよう。